

信仰と訓練 (12 : 1~11)

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

## 2. 手紙の内容と11章・12章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。彼らの手本を一言で言えば、苦難の中での忍耐である。
- (3) 12章では、「信仰の忍耐」の勧めについて語られる。
  - ① 1~11節・・・信仰と訓練
  - ② 12~29節・・・信仰と信者の義務
- (4) 本日は、12章1~11節 信仰と訓練 である。

## 3. 「信仰と訓練」(ヘブル12 : 1~11) のアウトライン

- (1) 信者を忍耐へ導き励ます二つのこと (1~2節)
- (2) どこまで忍耐すればよいのか (3~4節)
- (3) 苦難の目的 (5~11節)

□前回の内容 11章の結論部分(ヘブル11 : 39~40)を振り返る

## 1. 39節 「この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束のものは得ませんでした。」

- (1) 「この人々は、・・・あかしされた」
  - ① 「この人々」=アベルをはじめとする旧約の先輩たちは、認められた。認めてくださったのは、神である。
  - ② この箇所の前、38節では「この世は彼らにふさわしい所ではありませんでし

た」とある。これもまた、神が旧約の先輩たちを認めてくださった評価のことばである。この世は、彼らが無価値なものとして排除した。しかし、神の目からは、この世のほうこそ、彼らにふさわしい所ではなかったのである。

- (2) 「その信仰によって」・・・彼らが神に認められたのは、信仰を通してである。
- (3) 「約束のものは得ませんでした」
  - ① 旧約の信者たちは、神の約束を信じていた。
  - ② しかし、彼らは、地上の生涯においては、約束の成就を見ることはなかった。
  - ③ 彼ら自身の個人的な事柄に関する約束については一部、成就を見たものはあった。しかし、イスラエル民族に与えられた約束やメシアに関する預言などは、その成就を見ることなく、彼らは世を去っていった。
  - ④ にもかかわらず、彼らは自分がこの世を去る瞬間まで、神の約束を信じていた。彼らは、神の約束がいつの日か必ず成就すると信じて、未来を望み見ていたのである。彼らは、そのような信仰の中で、死を迎えていった。
  - ⑤ なぜ、神は、旧約の信者たちが神の約束の成就を見ることなく死んでいくことを許されたのか。そのことは、次の40節で教えられる。

2. 40節 「神は、私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはなかったのです」

- (1) 旧約時代の信者たちが約束の成就を見なかった理由
  - ① 神の計画・・・神は、旧約時代の信者たちと、新約時代の信者たちとを、ひとつに合流して、両者が共に約束の成就を喜ぶように、計画しておられる。
  - ② メシアの王国に関する約束がまだ成就していないから、旧約の信者たちも、新約の信者たちも、同じことを待ち望むことができる。
- (2) 「彼らが、私たちと別に、全うされる（完成される）ということ

  - ① 彼ら＝旧約の信者たちも、私たち＝新約の信者たちも、別々ではなく、いっしょに、完成に達するのである。
  - ② 完成に達するとは、聖化の完成であり、栄化である。信者の内側に罪の性質はなく、体はメシアの復活の体と同じ、復活の体、不死の体にされることである。それは、メシアの王国が到来する直前に、成就する。

3. 旧約の信仰の先輩たちは、私たちにとって、すばらしい手本である。

- (1) ヘブル6:12は次のように語る。「あなたがたが怠けずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです」。「あの人たち」とは、旧約の信仰の先輩たちである。
- (2) 11章で、旧約の信仰の先輩のことを述べた。
- (3) そして、12:1の「こういうわけで」に続く。信者を忍耐に導き励ます二つのことのうちの第一は、旧約の信仰者たちの手本である。

□信者を忍耐へ導き励ます二つのこと（ヘブル 12 : 1~2）・・・第一は旧約の信仰者たちの手本、第二はメシアご自身が受けた苦しみである。

1. 12 : 1 「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」

(1) 多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いている

① ASV 訳では、「あの雲のように多い証人たちに私たちが囲まれているのを・見て」・・・旧約の信仰者たちが、天から地上の出来事を見ているというわけではない。見るのは「私たち」、地上で信仰生活をしている信者である。

② (直訳)「したがって、私たちは、このようにあの証人たちの雲に私たちが囲ませて」 雲<sup>ギ</sup>ネフォス・・・ちぎれ雲ではなく、多くの雲のひとつかたまり

③ 多くの旧約の信仰者たちの手本を私たちの心の中に満たして →手本として

(2) いっさいの重荷を 捨てて (横に置いて)

① 重荷とは、この文脈では、ユダヤ教

② この手紙の読者たちは、信仰が成長しないで初歩の教えにとどまっていた (6 : 1~3)。それは、ユダヤ教の重荷を捨てきれないからであった。

(3) まつわりつく罪

① 定冠詞のついた罪で、直訳すると「あの・安易な方に流そうとする・罪」

② 安易な方に流れるとは、迫害を避けて、一時的にでもユダヤ教の神殿祭儀に戻ることである。

③ この罪については、10 : 21~31 で警告されていた。

④ 【現代への私たちへの適用】ユダヤ教とは関係のない、現代の私たちにとっては、私たちの霊的成長を阻む他の罪として、適用することができる。

(4) 私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けよう

① 信者の義務は、重荷も「あの・安易な方に流そうとする・罪」も、横に置いて、走り続けることである。

② この競走は、長く続き、忍耐をもって走らねばならない。いつまで続くのか？それは、信仰を通して救われた日から、肉体の死まで続く。これは、生涯続くマラソンである。

③ 競走<sup>ギ</sup>アゴン 競技・競走・・・英語 agony アガニ 苦痛・苦悩 (アガニ・コラム 新聞の「お悩み相談欄」、ただし米語ではアドバイス・コラム)

④ 忍耐<sup>ギ</sup>フポモネー・・・このままのペースで前進し続けることをしっかりと決意している状態を指す。スローダウンしようとか、やめてしまおう、そのように気持ちが弱ることもあっても、そこでペースを落とさずに走り続けることである。そうしていると、いつの頃からか、苦しみから抜けて、自然と喜びや



希望をもって耐えることができるようになる。これは、その人が自分で生み出した力ではなく、神によってそのようにされるのである。かくして、フポモネーとは、「喜びつつ、希望をもちながらの忍耐」となる。

2. 12：2 「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました」

(1) 2節では、信者を忍耐へ導き励ます第二、イエスについて

- ① 信者の前に置かれている競走では、苦しみに耐えながら走り続けなければならない。そのときに持つべき忍耐、その最高の手本はイエスである。なぜなら、イエスが受けた苦しみは、人が受けた苦しみの中でこれより重いものはない。
- ② 「目を離さないでいなさい」・・・これは単に、イエスを見よ、ではない。他のいっさいのものから目を離し、ただ一点、ゴールだけを見つめて走る。そのゴールは、イエスである。
- ③ ここで、「キリスト」ではなく、「イエス」と言うのはなぜか？ 「イエス」という名は、人としての名であり、イエスが人として受けた苦痛、侮辱、十字架刑での辱めを連想させる。そして、それらすべてに対して、イエスが人として示した忍耐を、思い起こさせる名である。
- ④ イエスは、従順と忍耐について、完全な手本である（I ペテ 2：19～24）

(2) 旧約の信仰者たちとイエスの違い

- ① 旧約の信仰者たち
  - 神によってあかしされた＝認められた。
  - 彼らが神に認められたのは、彼らの信仰を通してであった。
  - 彼らは、苦難の生涯の中で、彼らの信仰を表し、信仰者であることを証明した。彼らは、信仰の「証人たち」（ヘブル 12：1）となった。
- ② イエスは、信仰の証人ではない。信仰の「創始者」であり、「完成者」である。

(3) 信仰の創始者

- ① ヘブル 2：10 「救いの創始者」・・・イエスは、信者の霊的救いの創始者である。信者は恵みにより信仰を通して、霊的な死からいのちへと移された。この信仰は「救いにかかわる信仰」である。
- ② 「信仰の創始者」・・・12章の文脈は、信者が信仰生活をどのように送るべきかを教えている。ここでいう「信仰」は、救いにかかわる信仰ではなく、霊的な成長にかかわる信仰である。旧約の信仰者たちがその生涯を通して現わした信仰も、救いにかかわる信仰ではなく、苦難に耐え、希望を持ち続ける信仰である。そのような信仰の創始者もまた、イエスである。
- ③ 「信仰の創始者」・・・「創始者」と訳されている<sup>ギ</sup>アルケーゴスは、広い意味

を持つ。著者、立案者、パイオニア（最初に始めた人）、チーフ・リーダー、模範、創作者、など。

- この文脈では、イエスは、手本となるような信仰をご自身の地上生涯に具体的に書き著した著者である。
- また信者にとって、単に手本ではなく、信者の霊的成長の歩みを計画し、立案しておられるお方である。
- そして、実際に、信者のためにとりなして下さり、折にかなった助けを与えてくださる（2：18、4：15～16、7：25）、先導型のチーフ・リーダーである。
- このチーフ・リーダーは、信者を導いて決して失敗することはない。なぜなら、次に述べるように、信仰の完成者だからである。

(4) 信仰の完成者・・・ギテレイオウテース 仕上げる人、完成する人

- ① イエスは、たしかにその地上生涯を通して、完全な信仰を示した。しかし、ここでの文脈は、イエス自身の完全な信仰を指しているのではない。
- ② この文脈では、イエスは、信仰を仕上げる人、完成する人である。信者が信仰をもって忍耐していくなら、イエスは、その信者の信仰を完成して下さるお方である。

3. 12：2 「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました」

- (1) 「忍び」・・・イエスが忍耐した理由がここにある。それは、イエスの前に置かれた喜び、ゴールを見つめていたからである。
- (2) その喜びとは、次の2つ
  - ① 天において父なる神とともに輝かせていた「光」を回復すること（ヨハ 17：5）→神の御座の右に着座されました
  - ② イザ 53：11「彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう」・・・「多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう」→失われていた者たちの救いを達成すること
- (3) 「十字架を」・・・この箇所「十字架」には、定冠詞がついていない。
  - ① 定冠詞がついていれば、「あの十字架を」となり、イエスが具体的にどのような十字架にかかり、十字架の上でどのように死んだのか、ということを思い起こさせる意味になる。
  - ② それに対して、定冠詞なしの場合は、「十字架刑というものを」となり、人々が十字架と聞いてそこからまず連想すること、すなわち「恥辱にまみれた死

を思い起こさせる。当時、十字架というのは、恥辱の象徴であった。イエスは、最も屈辱的な死を味わったということである。

- ③ それが「はずかしめをものともせず」という言葉につながる。
- (4) ここには、地上で受けた恥辱的な死と、その後天上で受け取る喜びとの対比がある。
  - ① 十字架ははずかしめを受ける場所。イエスはその十字架の上で、【贖い、なだめ、和解】を成し遂げた。イエスが十字架の恥を進んで受けたのは、十字架の上でそれらの使命が果たされることを知っていたからである。
  - ② イエスは忍耐をもってその使命を果たし、前に置かれていた喜びを得た。そして私たちを救ってくださった。今、イエスは、父なる神の右の座に着座しておられる。

#### □どこまで忍耐すればよいのか (3~4 節)

1. 12:3 「あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです」
  - (1) 1~2 節では、信者を忍耐に導き励ますための 2 つのことが語られた。3 節では、どこまで忍耐すればよいのか、という問いに対して答えることになる。
  - (2) 2 節では、イエスが受けた苦しみについて語った。そのことを念頭において、「罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方」=イエスのことを考えなさい、とつながる。
  - (3) 「考えなさい」
    - ① **ギ**アナログゾウマイ、思考や推論を積み重ねる・・・英語の analogy 類推の語源、ギリシヤ語の文字通りの意味は、数字を足し上げて合計を算出すること。  
→ イエスが受けた苦しみをひとつひとつ詳細に思い起こして、それらをすべて一つの全体像としてまとめあげること。
    - ② 信者は、イエスの受けた試練と苦難について、自分の思考と心の中で具体的に把握できれば、イエスがどこまで忍耐したのか、についても理解できる。→ このとき、まず思い浮かぶのは、イエスが、人々からの嘲り、中傷誹謗、罵声を浴びて、それに忍耐したことである。
  - (4) 「イエスは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた」
    - ① 「このような反抗」とは、イエスが受けた嘲り、中傷誹謗、罵声である。私たち信者は、イエスがそれに忍耐したことを思い起こすべきである。そうすれば、私たちの心が元気を失い、疲れ果ててしまうことはない。
    - ② イエスが受けた苦しみがどのようなものであり、そしてそれがどれほどまでにひどいものであったかを見れば、私たちが実生活の中で受ける苦しみが、まだやさしいものである、と分かる。



- ③ 私たちが試練の中で元気を失わないために最も良い方法は、イエスの苦しみについて、聖書を読み、その場面をしっかりと頭と心の中に刻むことである。特に、イエスに罪はなかったこと、イエスは私たちのかわりに苦しみを受けてくださったことを覚えると、なおさらである。
2. 12:4 「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません」
- (1) 信者は、どこまで忍耐すべきなのか。4節は、そのことを教える。
- (2) 血を流す=殉教して死ぬ
- ① このヘブル人への手紙の読者たちの集会は、エルサレムの教会ではなく、エルサレムを除くユダヤ地方の教会である。
- ② エルサレム教会では、それまでに、執事のステパノ（使徒6:8~7:60）、使徒のヤコブ（使徒12:1~2）の殉教があった。
- ③ しかし、このヘブル人への手紙の読者たちの教会では、たしかに激しい迫害を受けていたが、まだ殉教者が出るまではなかった。
- (3) 抵抗する・・・**ギ**アンティカシステイミ、軍隊用語で、敵軍と激突する最前線に立って陣形を崩さず後退せず、踏みとどまって戦う、という意味。信者は共に陣形を組んで、霊的戦いの最前線に出て戦うべきこと、そしてときとして戦死者が出ることを戦場であるがゆえに当然のこととして覚悟しなければならない。
- (4) 罪と戦う・・・戦う**ギ**アンタゴウニゾウマイ、敵対するという意味のアンティと苦しみを伴う戦いを戦い抜くという意味のアゴウニゾウマイが合わせられたことば。強い敵意をもって、かつ苦しみに耐え抜いて戦う、という意味。信者は、罪を甘く見ないで油断せず、罪を敵対視して、厳しく戦わねばならない。その戦いは、どこまで行くのか。時として、血を流す、すなわち、殉教するところまでである。

## □苦難の目的 (5~11節)

## 1. 12:5~6

- (1) 箴言 3:11~12 の引用 → 苦難は、神の裁きではなく、神が与える訓練である。
- (2) 訓練の度合いは軽いものから重いものまで。訓練に応答せずにいると起きることも軽いものから重いものまで。「弱くなる、病気になる、死ぬ」(I コリ 11:30)

## 2. 12:7~9

- (1) 7節 箴言からの教えを適用する。「訓練と思って耐え忍びなさい」

- ① 神の訓練を受けるとき、それが有益なものとなるかどうかは、信者が霊的に喜んでそれを受け取るかどうかにかかっている。
- ② 懲らしめを受けたとき、心の思いとしてたしかに悲しむが(参照 11節)、同時に信仰の思いとして、それを父なる神が自分を愛する子として扱ってくださっているのだと理解して喜ぶ、この一見すると相矛盾するような内面の状態が、信者の内側では起きる。これは信者が信仰の成長をしていくときに誰もが経験する道筋である。
- ③ 「父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか」・・・親が子どもをしつけて成長させる、という意味のことば。裁くことではない。子であれば、父から訓練を受けるといふこの教えが、8節と9節でさらに展開される。

- (2) 8節 → 読者たちは、今、苦難の中にあるのだから、信者であり、神の子である

- (3) 9節 → 霊の父に服従して生きるべきである

## 3. 12:10~11

- (1) 10節 神の訓練は、この地上での生活において実際的な聖さ(清さ)をもたらす

## (2) 11節

- ① 信仰の忍耐は、二つの結果へ
  - 平安の実(反抗的な霊魂が従順な霊魂に変えられる)
  - 義の実(義人としての地位にふさわしく、その人の内面が変えられる)
- ② 訓練の結果、信者は平安な義の実を結ぶ。これは10節の「聖さにあずからせる」といふことの、具体的な現れである。